

新書 解題



規重 野の 規重 野の
規重 野の 規重 野の

いきなり私事で恐縮だが、筆者は子どもの頃、いじめられっ子であった。その後たまたま転校したり、学年が上がったりして環境が変わり、いつの間にかいじめを免れるようになったが、その時期の辛い思いは心のどこかに残っている。

それだけに荻上チキ『いじめを生む教室』（PHP新書）を読んで、ちょっとハッとした。いじめとうたと、とかく「いじめっ子」もしくは「いじめられっ子」の個性に注目が集まりがちだ。いわば人にいじめの原因を見いだす視点である。

が、本書が注目するのはむしろ環境である。日本の場合、子どものいじめの舞

「いじめ」を生む環境とは



デザイン・松永路

台は教室であり、クラスメイトが加害者となり被害者となる。いわば特定のメンバーと長時間同じ空間にいて、かつその空間にストレスの多いことがいじめを生み出している。たとえれば、教室内のストレスをどうすれば低下できるか、いじめにあった子がいかにシグナルを発するか、そして、大人がそれを発見できるか。著者はデータに基づき、客観的に議論を展開する。

「いじめはいけない」と精神論を説くばかりでは、状況は改善しない。あまり

に忙しい教員の状況を踏まえつつ、具体的ないじめ防止の方法を説く議論には説得力がある。

次は職場のいじめについて。近年、様々な企業や組織での不祥事が話題になっている。共通して見られるのは、トップや上層部に対して意見が言いにくい雰囲気や組織に蔓延し、おおよそ一般社会では考えられないような「いじめ」や「しびき」が横行していることだ。本来、組織の健全さは、下の立場にいる人間（多くの場合、若者）が発言した

り、異議を申し出たりすることで保たれる。ところが、歴史のある「名門」において、しばしば代を重ねるとに上層部が「劣化」し、にもかかわらず、誰も物が言えなくなってしまう。その理由を探ったのが山口周『劣化するオッサン社会の処方箋』（光文社新書）だ。アートとビジネスをめぐる著作で話題を呼んだ著者の舌鋒は鋭い。組上に載せられている50代、60代の「オッサン」の一人として、耳に痛い指摘も多い。もっとも著者によれば、問題は性別や年齢ではなく、「古い価値観」「既得権益」「階層序列」「排他性」こそがオッサン化をもたらす。いかに組織の風通しを良くするかをめぐる議論は重要だろう。

何より「オピニオン（きちんと意見を言う）」と「エグジット（いざとなったら脱出する）」が大切だというのは、子どものいじめと共通する重要テーマだ。大人の社会と子どもの社会はどこか似ている。問題と処方箋も同じだ。まったく異なるテーマを扱う二つの本に、どこか共通のメッセージを感じた。

最後は話のスケールがさらに大きくなり、国際社会である。アメリカのトランプ大統領の言動などを見ていても、どうやらグローバルレベルでも「いじめ」が増加しているように見える。現代のポピュリスト的指導者の多くは、社会の多元的な価値を認めない。特定の政策的アジェンダに対する賛成・反対で有権者を二分し、それに道徳的な善悪を割り振る。「自分たちは正しく、悪いのは奴らだ」と言うわけである。

森本あんり『異端の時代』（岩波新書）は、このようなポピュリズム指導者の思考の背景にあるものを、壮大なスケールで分析する。丸山真男の異端論から出発し、様々なキリスト教神学のとピックを取り上げたのち、現代民主主義に対して警鐘を鳴らす著者の論は読み応えがある。

一人よがりの正義を振り回さず謙虚であり、信頼する友と共同作業を重ね、粘り強く自分の位置とアイデンティティーを確立する。その重要性を著者は説く。「いじめ」が横行する時代への最大の対抗策であろう。（東大教授・政治学）